

平成二十六年 春

はらから
同胞と ともに歩みし 二昔 熱き涙珠 壇を超行く (最終講義)

茜さす 夢を残して この先を 遅き歩みを 楽しみ行かん

退職の 重さと軽さ 如何に量らん (帰阪)
荷をほどき 思いめぐりて 時がゆく

月昇り 水面にともに 森影と

雲起ちぬ 山並みおぼろ 春うらら

紅白の 定めの色を 競い合う 愛でた愛でたの はなみずき

曼荼羅の 夜空に 混じる 眉の月

春去て 我過ごし日を つくづくと

薰風に 緑きらめく 色重ね

平成二十六年 夏

果てしなき 荒野を目指す 我ごとく 岩にとりつく 虫魂よ
花咲かの 翁のごとき 見事さよ 緑ほころぶ 錦木萌えて
雨上がり 朝の景色の 色気配 五感集いて いと樂しけり

起—誕生

みどりご

両の手に 余る嬰児 垣間見て 命の不思議 老いの氣覚ます

承—一ヶ月

幸あれの 型切文句 安けらし 寝顔に向けて 膽せず贈らん

転—三ヶ月

初孫の 百面相に 癒されて 寂しき秋に 錦の紅葉

もみじ

平成二十六年 秋

上弦の 月に備願 託せんと 見上げる光に 天高くあり
酔いの香と 夜風に惑う 虫の声

雲海を 風を頼りに 月涉たる

秋深し 名残を競う 虫の声

風立ちて 光舞い散る 水面へと

鳥の目に 換わりて見たや 空と海 (北陸路)

朱色來い 鶯の鳴き声 ピユーロピユーロ 東尋坊の 荒磯の宵

山並みの 頂き隔てる 雲海の 豊かに伸びし 朝もやの光

錦秋の

彩り隠す 宵下がり 三日月昇り おぼろに浮きたつ

平成二十六年 冬

嵐さり 寒氣に集う 濡れ落ち葉

歳の背や 自己 (公) 満足に 七百億 (無駄な年末選挙)

滔々と 齡重ねし この光を 一日一生 色とりどりに (母年壽)

雪雲の 覆いし空の 寒々さ 水面翳りて 魚影見えず

厳寒に 月冴えわたり 乾心を射る

耳を切る 刃の如き寒風に 負けじと挑む 道まだ遠き

朝焼けを 酿す火の玉 僞き出し 白き冬空 彩り加え

風風いで 山水懸かる 寒の宵

まちまちに 木立を射抜く 朝日さし 溫もり足して 寒氣和らぐ

オリオンの 懸かりし凍天 冴えわたり 時空を超えた 光たゆまぬ

きらきらと 朝日に跳ねる 霜柱 白き吐息に 凍える手足